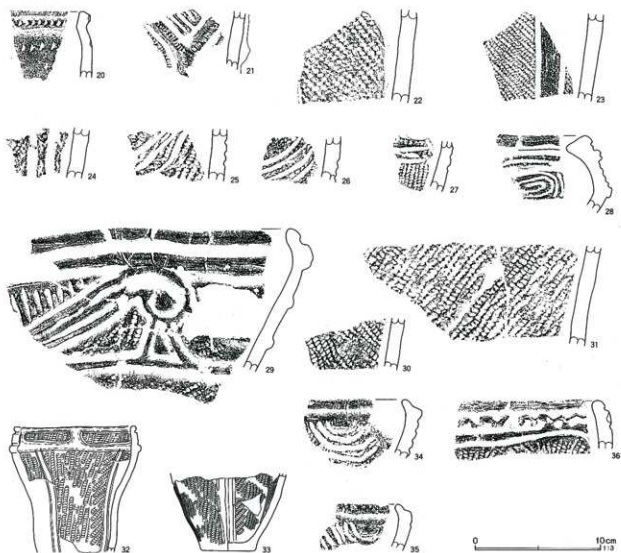


第35図 縄文土壌出土遺物（2）



第296号土壌（第34図）

調査区中央のA-Q-15グリッドで発見した。おなじ縄文時代の第83号住居跡・第88号建物跡、そして理論上では第85号住居跡とも重複する。第83号とは断面観察で本壤の先出を確認している。また、第88号とは、わずかな重複で、判断がつかなかった。

実は、平面図を観察すると、外形の違和感に気づき、さらに、違和感の延長にわずかな段差が存在した。調査時は第83号・第85号住居跡の確認に惑わされ、詳しい観察と付番号を忘れたが、やはり2墓の重複とみるのが自然だろう。その後もこの遺漏を発見できず、気づいたのは整理作業も佳境をすぎたところであり、修正

ままならず、報告をむかえてしまった。ここでは、東をA、西をBとして記載する。

平面形態は、いずれも楕円形を呈すると考えられ、0.90m強となる短軸規模の共通からすれば、ほぼ同規模の土壌と考えられる。覆土は、双方ともに褐色土で、断面図では重複線が想定される2箇所のいずれにも第83号の柱穴があるため、今となっては両者の先後は判断しようがない。

遺物は、どちらの帰属かわからない縄文土器3点が出土した。すべて勝坂系土器の無文部と考えられるものである。

第297号・第298号土壌 (第34・35図)

調査区の北西 A P-15・16グリッドで検出した。2墓の西では第78号住居跡と、南では第87号建物跡や二つの単独縄文ピットとも重複する。前者との関係は不明であるが、第87号とは第297号が後出することを確認した。また、同号は第298号も破壊している。そして、第298号と第87号の先後は判断できなかった。

両者とも規模に0.3m程のちがいがあがるが、大きめの楕円形を呈し、浅い掘りこみも共通している。他の土壌と比べると壊底の安定感が大きい。共通するのはむしろ第79号住居跡の張出部などで、それぞれが円形配列の柱列をもつ第78号・第80号の張出部になるかとも考えた。だが、出土した土器に若干の時期差がありそうで、ここでは土壌として扱った。

覆土は、第297号が暗褐色土、第298号が褐色土を主体としており、大方の混入粒子は共通するものの、第298号の方がローム粒子の粒大と量に長じている。

遺物は、双方の覆土から62点が出土した。調査途上にいずれの層属かが判別できなかったため、整理時は一括して取り扱った。これらは、わずかながら阿玉台・勝坂系を含むものの、ほとんどが加曽利E系の土器であった。第35図には6点を示したが、23・24がキャリパー形土器の胴部片、25～27が連弧文系、28が文様帯を設定する浅鉢と考えられる。

第299号土壌 (第34図)

調査区の北方 A Q-15・16グリッドで発見した。縄文の単独ピット3墓や攪乱に壊されているが、辛うじて検出できたものである。理論上は第87号建物跡と重複関係にあるが、先後を判断する材料はなかった。

平面形態は径1.00m前後の円形に近い形と考えられ、深さは確認面より0.22mあった。覆土は、暗褐色で、ローム・焼土粒子を含む。

遺物は、出土しなかった。構築時期の判定は、主として他の縄文土壌における覆土との類似性と遺構構築期の集中度による。

第300号土壌 (第34図)

調査区の北部 A Q-16グリッドで発見した。3墓の縄文単独ピットと重複するが、調査がいずれも壊底までたどり着いた時点で、より黒味の強い土が発見できたため、本壊がこれらを破壊したと考えられる。

平面形態は、径1.10m前後の円形で、深さは確認面より0.19mを測る。覆土は褐色系土が主体で、ローム粒子や焼土粒子が混入していた。

遺物は、3点の図示にたえない小土器片が出土したのみである。すべて加曽利E系であった。

第301号土壌 (第34図)

調査区の中央 A Q-14グリッドで検出した。初回の確認作業では発見できず、重複する第2号掘立柱建物跡との関係は確認していないが、覆土の差から、本壊が古いのは確実である。

平面形態は、径1.20m前後のほぼ円形で、確認面から0.34mの深さがあった。覆土は、やや明るい褐色系土で、他に比して確認しづらい土色であった。ローム粒子を多く含んでいた。

遺物は、加曽利E系土器が1点出土したにすぎない。

第302号土壌 (第34・35図)

調査区の中央東寄りの A R-15グリッドで検出した。第2号掘立柱建物跡の柱穴と重複する。同号調査時には本壊を確認してなかった。だが、今回調査地点で見られる各時代の覆土差からすれば、先後の関係に疑念の余地はない。

形態は、径1.00m強の円形で、掘り込みは確認面から0.10mと浅い。覆土は、ローム・焼土粒子混じる褐色系土の単層であった。

遺物は、下層より加曽利E系前半の土器が4点出土している。第35図29～31が本壊出土品だが、29はキャリパー形土器の口縁部文様帯部である。隆帯による主構図は二本一組となるが、単層帯上に沈線を施し二本にみせかけるのではなく、別個に貼付されている。

第303号土墳 (第32図)

調査区の南西AR-13グリッドで検出した。おなじ時代の第283号土墳とわずかに重複するが、本墳の存在に気づいたのは調査も終わり近くになってからであり、先後の程は確認できなかつた。また、本墳を破壊する縄文時代の単独ピットが断面観察線にかかったが、形態を把握できなかつた。

形態は、長径1.35m、短径0.83m、深さ0.47mの楕円形となり、なだらかな傾斜からつづく墳底の平坦部は小さい。覆土は固くしまった褐色系土で占められ、全体にローム粒子、そして、一部にブロックを含む。最上層には焼土粒子の混入もみられた。

遺物は、閃緑岩の磨石片が出土したのみである。

第304号土墳 (第34・35図)

調査の最後に調査区南のAR・AS-13グリッドで発見した。理論上は第84号住居跡と重複関係にあるが、検証可能な重なりは存在しなかつた。

形態は、径1.20m前後のほぼ円形で、深さは最深部で0.43mあった。覆土は、炭化物を少量含む褐色土で、第303号土墳と類似していた。

遺物は、上層から下層までのいずれでも出土しているが、比較的大きい土器片は中層で多く出土した。覆土からは土器・石器類36点が出土した。うち33点が土器で加曾利E系がすべてで、このうち2点がキャリバー形土器の大片として接合した。残りの3点は石器類で、打製石斧の断片と剥片が2点であった。

本墳出土品は第35図32-36の5点の土器を示した。すべて加曾利E系土器で、32・33は器形を推しはかれるキャリバー形土器である。副部の沈線区画と縄文施文は曖昧で、一部無文帯に縄文が残る。また、34・35も重弧を展開するキャリバー形土器の口縁部片と考えられる。そして、36は、口縁部直下の区画帯にある交互刺突と、破片右端で気配をみせる沈線の垂下や、条が縦に走る縄文施文の手法から、連弧文系土器の破片と思われる。

(4) 土器集中

AQ-15グリッド土器集中 (第36図)

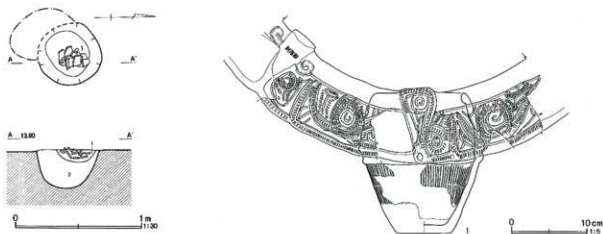
重機による表土削除直後、AQ-15グリッドの北西で、まとまった土器が散乱していることに気づいた。勝坂系土器がすべてと判断し、住居跡の存在を頭に周囲を調査したが、それらしきものはみつからず、また、出土状況から通常の埋没概念からはずれている。下位に掘りこみを検出したが、径0.50m弱と、規模も小さく、他の土墳と区別するため、現地では単独の土器集中としてあつた。

図に示したように、出土状況は個体が潰れた状態というよりは、破片を取りまとめたという趣である。さらに、整理時ほとんどが接合し、勝坂系の土器として成長した。あとは小片が5点残るのみであった。これらが別個体ならば、かたづけなどの行為として考えられるが、完全の1個体をあえてこのような形に整えるとなると、何らかの意思的所作を想定せざるを得ない。加えて、この土器の実測段階で把手部の一方に人形?の剥落痕を発見し、剥落の範囲やあざやかな剥離状況の観察から、さらにその意を強くした。

下位にははっきりとしたピットが掘れた。これは、土器のまとまりから多少ずれており、別遺構ともとれる。だが、土層観察の結果、暗褐色から褐色を呈する両層の移行は漸移的であり、同一遺構と判断した。土層観察の限りでは、混入粒子なども他の土墳と変化なく、埋め戻しの痕跡はわからなかつた。しかし、以上を総合すれば、物体の有無にかかわらず、なにかを封ずるために、彼らにとって象徴的な個体が破壊され、並べ置かれた可能性が高い。

出土土器は、4本の仮想縦線によって主従2対の文様帯を構成する胴部文様帯土器である。縦線のうち2本は口縁部素文帯にまでせり上がり、三角区画として膨張するとともに、一端に手(前足?)が加えられる。脚(後足?)は接続する下位区画線を一体とみなすことで表現されていると考えられる。隆帯脇の沈線は一本引きで、交互刺突や三叉文が付加される。把手左の文様は二面とも欠損しており、想定できない。

第36図 AQ-15グリッド土器集中



(5) 遺構外

遺構外出土土器 (第37図)

遺構外からは、天箱にして、1箱ほどの遺物が出土した。近世期に製作されたと考えられる、ごくわずかな陶磁器類を除き、ほとんどが縄文時代中期中葉から後葉を中心とした時期に製作された土器であり、石器は発見できなかった。

縄文土器の分布は、調査区のなかで大きな偏差はなく、北東側がやや出土量に勝るほかはこれといった大きな傾向を見出すことができなかった。

出土した土器の一部は第37図に示した。1～10は勝坂系土器で、全体の構成が不明な個体が多い。1～4までは小型の胴部文様帯土器の破片と考えられる。また、5～7は工具文施文のすべてを刺突系の施文でまかなうものである。

11～13は阿玉台系の土器で、すべて胎土に雲母が混入されている。だが、11は器面が丁寧にナデこまれており、12・13のような特有の砂質感がない。高さは異なるが、三者とも口縁下に内稜をもち、12の施文は竹管を使用している。

14以下は、加曾利E系と、それに従属する系列の土器群で、14～20はキャリバー形土器の口縁部文様帯片

である。各期のものが出土しているが、14は小波頂下の粒の細かい縄文施文に充填法を用いている。

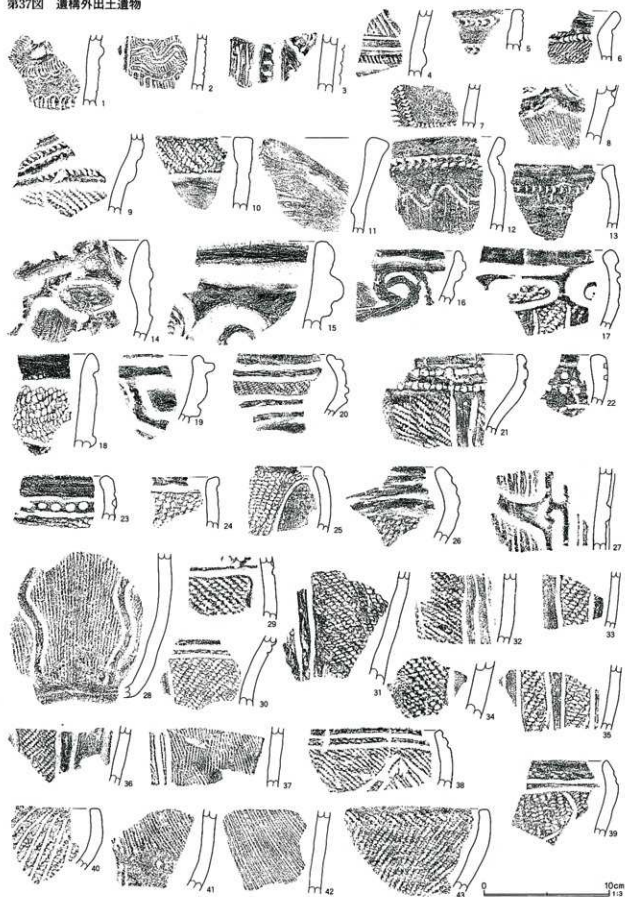
21～26は別趣の口縁部片であるが、一部判然としないものもある。21・23はおそらく垂下無文帯だけが巡る型と考えられる。また、25は連続波状文系の個体である。そして、22・24は詳しい構成がわからず、口縁部文様帯の一部となる可能性を残すものである。

27～37は、垂下文の胴部片である。線種や線間の狭さと角度から類推すれば、キャリバー形と垂下文のみの二種の可能性が高く、連続波状文は考えられない。27・28は、陸帯によっているが、他は沈線施文であり、線間の磨消の有無による二分も可能である。また、29は交互刺突、37は細かい燃糸文が施文されることより、後述する連弧文系の胴部であるかもしれない。

38・39は連弧文系の個体である。このうち、39は第76号住居跡出土の第12列3と同一個体の可能性が高いが接合できなかった。また、40は縄文地に曾利系の線描写を沈線でおこなった変形土器である。

41～43は、素文のみが器面を埋めると考えられる個体であり、41・42は糸線、43は単節RLが横縦位施文されている。

第37图 遺構外出土遺物



2. 中近世の遺構と遺物

(1) 掘立柱建物跡

第2号掘立柱建物跡(第38・39図)

調査区の中央AQ・AR-14・15グリッドで検出した。理論上を含めると13墓の他遺構と重複関係にあるが、直接前後の確認ができるのは第89号建物跡、第285号・第289号・第301号・第302号土壌の計5墓である。これらはすべて縄文時代に構築された遺構で、覆土の差は平面的な観察の時点でも可能であった。もちろん、本掘立は、すべてを破壊している。

建物は、N-19°-Eを指す東西棟で、総体の規模は、桁側が11.76m、梁側が7.85mとなる。桁行3間×梁行2間の長方形を身舎とし、東西南北の四方に庇部を設ける。身舎部分の規模は、桁側で9.57m、梁側で5.43mとなる。庇部の張り出しは南北面で長く、東西面はやや短い。

柱穴の配置は、整然というわけにはいかず、所々で構想定線からはずれたり、柱間をちがえたりするが、身舎北面、庇北面、庇西面が比較的安定して配置され、ほぼ等間を保っている。

身舎の側柱をさらに詳しくみると、梁側は約2.70mの完全な等間となっている。また、桁側では3間のうち中心間が約3.00m、両側が約3.30mと中心がやや狭く圧縮された形で設定されている。

また、身舎北面に並ぶ4本のうちの中心二柱に呼応するように、身舎内に柱穴の集中部が認められる。これらは、重量物を支える束柱的な用途をもっていただけ、2~3本を組として、さらにそれらの等分点にも1本が追加される。

これらが身舎側柱と対等な総柱造と理解することもできるが、柱穴の集中は梁側の二等分線より北に集中している。その片寄りを根拠に、身舎北面の中心部に内陣のような施設が存在したと解釈した。身舎側柱中心が圧縮された形で設定されていることも、その強度を意識した証左となるだろう。

このほか、建物構造の想定線上にあてはまらないが、

おなじ特徴をもつ柱穴が、特に梁側の二等分線より北の内陣付近に集中して分布する。これらも建物の何かを支えたとも考えられるが、見当がつかない。

実は、建物の東は調査区域外にかり、柱穴配置を単純にたどるだけでは全体規模を特定することができない。だが、前記した全体像は、内陣の可能性と、比較的柱間が安定している身舎と庇の北面線にみる柱穴の対応関係より、東西方向の対称軸を設定し、導きだしたものである。

さらに、一見不規則にみえる南面の配置も、たとえば、内陣部の中心柱と身舎の中心柱が建物の対称軸線上に配置され、内陣に沿うように西に二穴が並ぶなど、にわかには判断つかないが、気まぐれとはいえない配置が認められる。

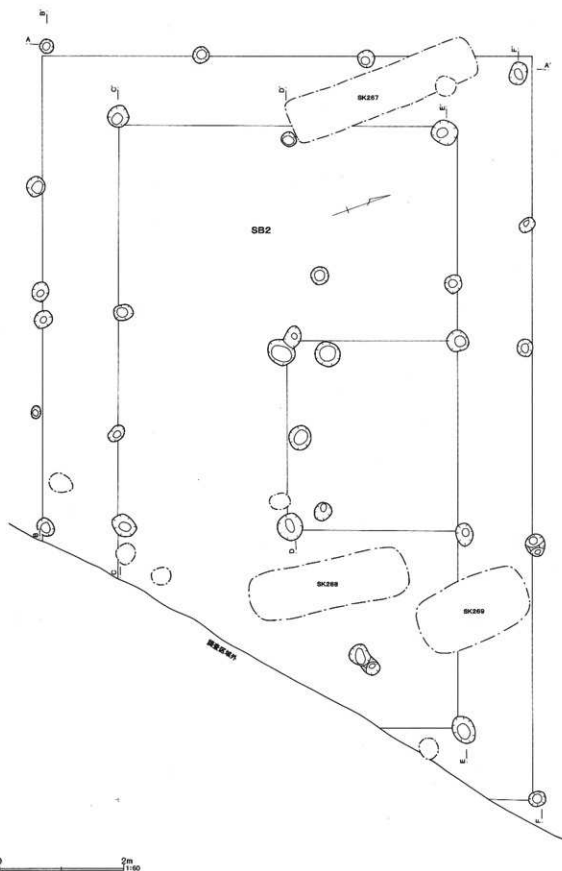
個々の柱穴は、確認面から0.56mの深さが最も大きい値で、やや頼りない。なかには、確認面からわずか0.09mというものもあり、深さによる安定というよりは柱のあたりを求めた結果と受けとれる。

柱痕は、深い柱穴の下層でそれらしきものを認めたが、柱穴内のすべてにわたって観察できたわけではない。これを含めた覆土は、全体にローム粒子が混じる黒褐色から暗褐色系土で占められ、縄文・近世のいずれの時期とも異なる特徴をもつものであった。

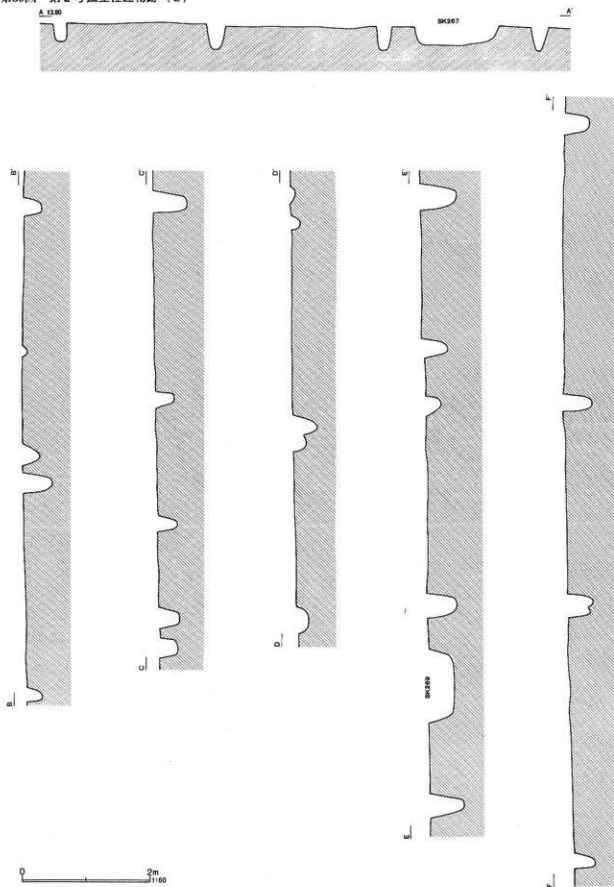
遺物は6箇所の柱穴より6点が出土しているが、いずれも縄文時代中期の土器片であり、本遺構構築時に混入したものと考えられる。

本掘立は、四面に縁とも解せる庇をめぐらし、補強された内陣を備えることから、寺社の類を想定できる。周辺には「やとうじ」「やとうじのはたけ」などという通称が残ることを近所の方からうかがったが、人名か、この建物の名残なのかは判断できない。また、調査区内では他にも、本掘立の覆土と共通する特徴を持つピットがいくつか発見できたが、建物の存否や本掘立との関係は把握できなかった。

第38区 第2号掘立柱建物跡 (1)



第39图 第2号掘立柱建物跡(2)



(2) 土壌

第250号土壌 (第40図)

第6次調査区の南西隅、A S-12グリッドで検出した。長軸方向の両端は調査区外にかかるが、おおよその全体形は、他の主流とおなじく長方形となると考えられる。主軸はN-11°-E、短軸方向0.85m、長軸方向は現状で1.76m分を調査した。深さ0.23mの断面形は、鍋底状で、他の一般的な特徴と同一である。

覆土は、他の近世土壌と共通する暗褐色から褐色系の土で占められ、ロームのブロックや粒子をわずかに含む。遺物は、25点が出土したが、すべて覆土中に混入した縄文時代の上器であった。

第251号土壌 (第40図)

調査区の南西、A S-13グリッドで検出した。一部は調査区外にかかるが、平面形態は他とおなじく長方形と確定できる。また、第84号住居跡の柱穴との重複は、本土壌の調査中には気づかなかった。だが、両時期の覆土差から、本土壌の後出は歴然としている。

主軸はNを指し、短軸長は1.05m、長軸方向は2.00mまでを調査した。他に比して短軸長が大きいため、長軸長も他の土壌で平均的な2から3mを超えるかとも思えるが、判断できない。

覆土は、暗褐色を基本とし、両壁際に近づくほどにロームブロックや粒子を多く混じえるようになる。遺物は、5点が出土した。だが、すべて覆土中に混入した縄文土器であった。

第252号土壌 (第40図)

調査区の南西、A S-13グリッドで発見・調査した。第84号住居跡と重複していたが、本土壌の調査時は同住居跡を確認できていなかった。しかし、縄文時代の遺構とこの期の遺構の覆土差は歴然としており、南方の形態把握に遺漏はないと考える。規模は、長軸2.47m、短軸0.89mの長方形で、長軸の方向はN-5°-Eである。

覆土は暗から褐色系土で占められ、ロームブロッ

ク・粒子が混在していた。遺物は、2点が出土したが、いずれも覆土中に混入した縄文土器であった。

第253号土壌 (第40図)

調査区の南西、A S-13グリッドで検出した。形態は、同期の遺構ではめずらしい径1.13mの円形で、断面形は緩やかな鍋底状となる。

形態は他と異なるが、覆土は共通しており、ロームブロック・粒子の混入する暗褐色系土で占められる。遺物は、出土しなかった。

第254号土壌 (第40図)

調査区の南西、A R-13グリッドに位置する。第73号住居跡と重複するが、覆土の差は歴然としており、精査前に判断できた。平面形態は長方形、主軸方向はN-9°-Eである。規模は長径2.28m、短径0.87m、深さ0.27mであった。

覆土は、暗褐色系土で、ロームブロック・粒子が混じる。遺物は、8点が出土したが、いずれも埋没過程で混入した縄文土器であった。

第255～263号土壌 (第40図)

A S・A R-13・14にまたがって分布する9基の重複である。形態はいずれも長方形で、一線をめざすかのように重複している。調査中は個々の遺構の存否や形態の把握に追われ、覆土の観察から判断できた土壌間の先後関係は、断面図Cに示した4墓に関わるもののみである。このほか、縄文時代の遺構である第91号・第92号建物跡・第285号土壌とも重複していたが、覆土の差は明確であった。

このうち、第255号は方形ながらも0.50m強の正方形に近く、第256号に一致する東西壁をもつ、あるいは、第256号の付属施設なのかもしれない。両者の軸方位はN-8°-Eを指し、第256号は、短軸0.68m、確認長軸長4.02mと、第258号と同様な長大な土壌となる可能性がある。

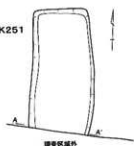
第258号・第259号の軸方位も、基本的には前二者と

第40図 近世の土壇 (1)

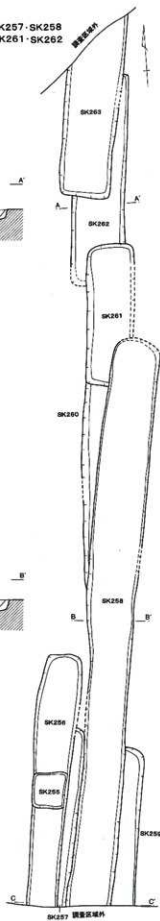
SK250



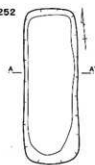
SK251



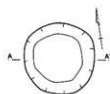
SK255・SK256・SK257・SK258
SK259・SK260・SK261・SK262
SK263



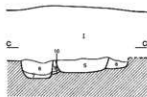
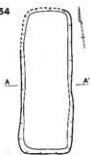
SK252



SK253



SK254



0 2m 11/90

同一である。第258号は確認済みで9.03mにおよぶ長大なもので、第259号を破壊して構築されている。途中いびつな形態となる部分があり、複数基の重複を取り違えた可能性もある。

これに対し、第260号～第263号の軸方位はN-5°-Eと、南の五者と設定規格を異にしている。第260号は全容が見当たらないほどに他土壌と重複しており、西壁の遺存によって辛うじて軸方向が推しはかれるのみである。この点では隅部を検出したように表現した第262号の北方壁の位置にも不安がある。

一方、第263号はふたたび南の一群と共通する軸方向で構築されているが、切り立った壁の掘りこみも深く、底面への移行もはっきりしており、調査時には若干趣が異なるような印象を受けた。だが、これが用途などの変化か、単なる掘削時の偏差にすぎないのかは判断できなかった。

これらの覆土はほぼ共通しており、暗褐色から褐色系の軟らかい土で占められ、下層ほどローム粒子を多く含む。ロームブロックは少ないであった。

遺物は、第258号土壌より13点、第263号土壌より33点が出土した。だが、すべてが埋没途上に混入したと考えられる縄文土器であった。

第264号土壌 (第41図)

調査区の南西、AS-14グリッドで検出した。発見できた範囲では第72号住居跡の覆土中に構築されており、当初気がつかず調査区壁側に破壊してしまった。そのため、同住居跡と並行して調査するようになり、平面形態は略測メモしか残せなかった。

想定できる平面形態は長方形、軸方向はN、長軸長は調査区内で1.00m程である。これに対し、短軸長は0.86m、深さは0.15mであることを調査区の断面で確認できた。

遺物は、本土壌として精査したなかでは出土せず、重複する第72号住居跡の整理時にも気につけなかったが、確認できなかった。

第265号土壌 (第41図)

AR・AS-14グリッドに位置し、第72号住居跡と重複している。先後は遺構確認時に見分けが付き、別個に調査した。平面形態は、他と共通する長方形で、長軸長2.05mや短軸0.96m、深さ0.16mの規模や、Nを示す軸設定方位も、今調査で検出した長方形土壌の標準的な数値範囲におさまる。

覆土は、暗褐色から褐色系土が主体で、ローム粒子を多く混じえる他の土壌と共通するものであった。また、遺物は、混入したと解釈できる縄文土器が1点出土したにすぎない。

第266号土壌 (第41図)

調査区の中央、AQ-15グリッドで検出・調査した。重複が著しい今調査区の中で、単独で存在した数少ない遺構である。平面形態は長方形、主軸方向はNと、他に通じる傾向を示しながらも、規模は長軸1.93m、短軸0.82m、深さ0.13mと、やや長軸比が低い点で至近の第269号と共通する。

覆土は、第269号とのみ共通するわけではなく、他とも共通するローム粒子を比較的多く含む暗褐色系土が主体であった。遺物は、埋没時に混入したと考えられる縄文土器が2点出土したにすぎない。

第267号土壌 (第41図)

調査区の中央西寄りにあたるAQ・AR-14グリッドにまたがって検出した。論理上は第2号掘立柱建物跡の柱間線と重複するが、先後を確認できるほどの直接的な関係にはなかった。他に縄文時代の単独ピットと重複するが、覆上の差は歴然としていた。

平面上の形態は他と共通する長方形で、主軸方向はN-2°-Wと算出した。規模は、長軸3.15m、短軸0.75m、深さ0.30mとなり、長軸長に秀でた形態は南西に分布する土壌群と共通する。

覆土は、暗から褐色系土が主体でローム粒子を一部に混じえる。遺物は、出土しなかった。

第268号土壌 (第41図)

調査区の中央東寄りにあたるA R-15グリッドで発見した。縄文時代に構築された第89号建物跡と重複するが、調査中に覆土の違和感を覚えることはなく、覆土の差からも本土壌の後出は確実である。

平面形態は長方形、設定軸の方位はN-9°-Eであった。長軸長2.58m、短軸長0.83m、深さ0.19mの規模となるが、南北の壁がやや丸味を帯びるようにみえる。これが、用途によるものか掘削時の偏差かは判断がつかない。

覆土は、他と変化する暗褐色から褐色系の土で占められ、ローム粒子が多く、ブロックをわずかに混入する傾向がみとれた。遺物は、埋没途上の混入と理解できる縄文土器が2点出土したにすぎない。

第269号土壌 (第41図)

調査区の中央、A R-15グリッドで検出した。理論上は第2号掘立柱建物跡の柱間線が横切ることになるが、直接の重複関係はなく、先後は断定できない。

平面形態は長軸長1.82m、短軸長1.06mと他の同期長方形土壌より短軸比が高く、深さも確認面から0.51mと、浅いものが多い他とは異なる傾向がある。だが、軸設定の方向はN-3°-Wとほぼ北を指し示す他の傾向と共通しており、形態のちがいを掘削時の偏差とみなすことも可能である。

覆土に他土壌との大きなちがいは認められず、暗褐色から褐色系主体の埋土中にローム粒子・ブロックを混じえる混入物の特徴や量も共通している。遺物は、出土した3点ともが埋没時に混入したと思われる縄文土器であった。

第270号土壌 (第41図)

調査区の中央北西にあたるA Q-14グリッドから発見した。第290号土壌など、縄文時代の土壌とわずかにふれあうが、調査によって先後を観察できるほどではなかった。

規模が長軸1.53m、短軸1.04mとなる長方形で、規

模と長短軸比は他と変化するが、北側が深さ0.25m、南側が0.75mとなる二重構造を示す。二基の重複もとれるが、断面図作成線の設定時はこれに気づかなかったため、同一・重複のいずれかを確定できなかった。また、設定軸はN-26°-Eと、他と異なる傾向を示すが、その原因についても判断がつかなかった。

覆土は、深さによる変化は認められず、同期の他土壌と共通するローム粒子を混入する暗褐色系の土が主体であった。遺物は、覆土中から9点が出土した。だが、すべて埋没途上に混入したと考えられる縄文時代の土器であった。

第271号土壌 (第41図)

調査区の中央西部にあたるA Q-14グリッドで検出した。北西の一部は調査区外にかかるが、北東の隅部を検出しており、全容を推しはかるのに支障はない。また、第270号土壌と接せんがばかりに位置しているが、直接の重複関係にはない。

形態は一般的な長方形だが、長軸1.48m、短軸0.58m、深さ0.05mという小規模なものは、調査区南半の諸土壌とは趣を異にし、第274号など調査区北方に共通するものが多い。だが、軸方向はN-15°-Eと北方の一群とも微妙なちがいをみせる。

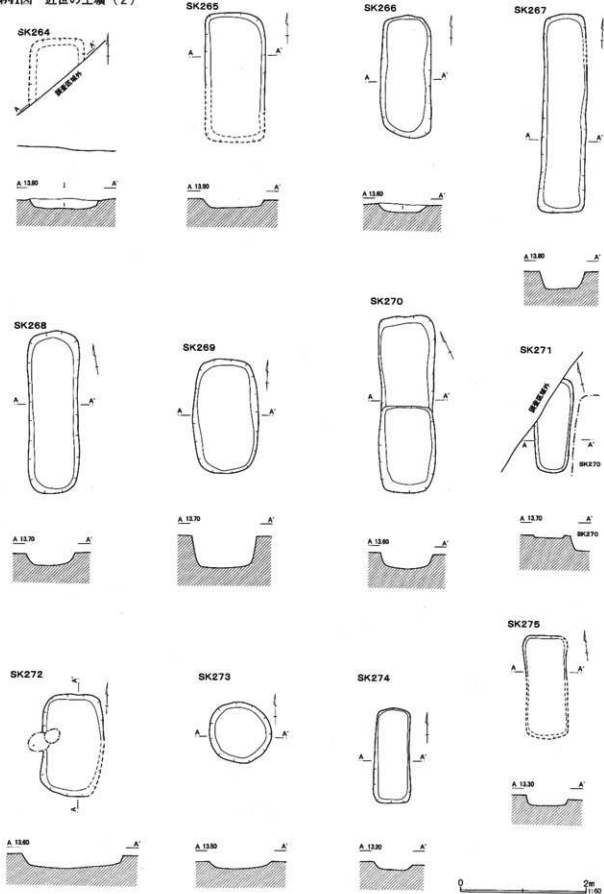
覆土は、他に比べてやや黄色味が強い傾向があったが、これは残された掘りこみがわずかなことと、下層ほど黄色味を増す他遺構の傾向を考えると、本層独自のものとはいきれない。遺物は出土しなかった。

第272号土壌 (第41図)

調査区の中央やや北西寄りのA Q-15で検出した。縄文時代に構築された第95号建物跡・第294号土壌・単独のピット1基、さらに中世のものともみられる単独ピット2基と重複するが、覆土調査中にこれらの後出を示すような土色や質の変化は感じなかった。

形態は、長軸1.62m、短軸0.97mの長方形だが、長短比は南群に比して差が少ない。だが、Nを示す軸方位や0.20mの深さ、なだらかな壁から底面への移行な

第41図 近世の土坑（2）



どの特徴は、むしろそれらと同一である。

覆土は暗褐色を主体とした一般的なもので、ロームなどの混入粒子もとくに変化ない。遺物は、チャートの剥片1点をふくめ、15点が出土した。だが、すべて埋没過程で流入した縄文時代の所産であった。

第273号土壌 (第41図)

調査区の北側かつ東寄りのA Q-16グリッドで発見した。開口部形態は、径1.00m弱の円形で、第253号土壌とともに、今調査で検出・調査した近世土壌の中では特異な形態となる。確認面からの深さは0.11mと、ごく小規模なものである。

形態は異なるものの、覆土は他の長方形土壌と共通するローム粒子を含む暗褐色系土が主体であった。遺物は、6点が出土したが、すべて混入と解釈できる縄文時代の土器であった。

第274号土壌 (第41図)

調査区最北端のA P-17で検出した。一部が既調査の対象地にかかるが、当時の圍柵保護部分にあたり、今調査ではじめて発見されたものである。また、縄文時代の第79号住居跡と理論上の重複関係にあるが、直に接する部分はなかった。

平面形態は長軸長1.50m、短軸長0.60m、深さ0.12mの規模の長方形で、規模や掘りこみの深さは、第271号土壌などの調査区北半に分布する小規模長方形土壌とほぼ一致する。加えて、軸設定はNと、近世土壌の大勢と共通する。

覆土は、第271号と同様だが、やはり同号とおなじことがいえるだろう。遺物は、出上しなかった。

第275号土壌 (第41図)

調査区北東部のA P・A Q-16にまたがって検出した。縄文時代に構築された第77号・第79号住居跡・第81号建物跡と重複する。遺構確認作業の際、長軸1.64m、短軸0.68mの長方形すべてが鮮明にみえたことより本土壌の後出が判断できた。だが、遺物が大量に散

布する第77号住居跡の調査を急いだため、同重複部の測量は略測のみを行ったにとどまってしまった。ただし、N-5°-Eを示す軸方向や0.16mを測る掘りこみの深さの判定には影響をおよぼさないと考える。

調査時、覆土は遺構より黒みが強めると感じ、別種、あるいは別時代のものかとも考えたが、軸方向や規模は近世土壌と違和感がない。密集する周囲の縄文時代遺構との差を意識しすぎた誤認と結論付けた。

遺物は、14点が出土し、そのうち1点が土壌構築期の所産と思われる捏鉢の破片であった。しかし、小片のため図示はしていない。他はすべて埋没途上に混入したと考えられる縄文土器である。

第276号土壌 (第42図)

調査区の北端A P-16で検出した。第76号住居跡とほぼ完全に重複し、理論上は第82号住居跡とも重複する。遺構確認作業時は第76号に目を奪われ、存在に気づかなかった。だが、第76号の覆土調査中に認識し、別個に調査した。だが、断面図作成面の補正は第76号のみ行い、本土壌は素掘りしてしまった。

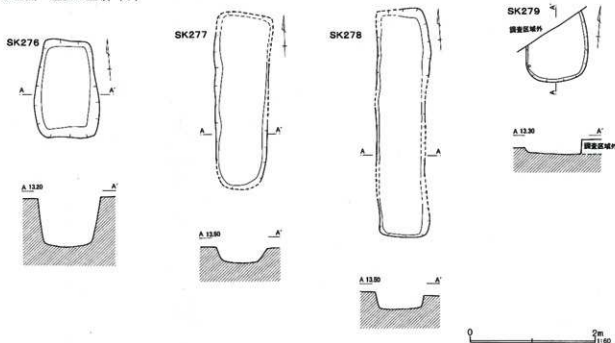
開口部の形態は、長軸1.53m、短軸1.04mのやや台形がかかった長方形で、その長短軸比やN-5°-Eを指し示す軸設定の方向は他の近世土壌と共通する。しかし、0.75mある掘り込みは他にない独自の特徴である。覆土も他に比してやや黄色味があり、ブロック状のロームがやや多かった。

遺物は、146点が出土した。だが、重複する第76号住居跡からの混入が多いためか、ほとんどが縄文土器片であった。このうち2点が、灯明皿の破片であったが、いずれも小片のため図示でなかった。

第277号土壌 (第42図)

調査区の北端A P・A Q-16にまたがって分布していた。縄文時代の第76号住居跡と、第82号住居跡の炉跡と直接の重複関係にあるが、確認時にその先後は判断でき、第76号では本土壌を避けて断面図作成線を設定した。また、第82号の焼土は本城重複部までは広が

第42図 近世の土壇（3）



っており、先後が確定できる。

平面形態は長軸長2.80m、短軸長0.86m、深さ0.24mの長方形で、 $N-4^{\circ}-E$ と算出できる軸方向とともに、他の長方形土壇と共通する特徴を示す。覆土も同様の暗褐色系土で占められ、ローム粒子を含む。

遺物は、21点が出土した。うち2点が産地不明の陶磁器類で、1点が半読不能の古銭であった。いずれも断片であるため図示していない。他は第76号住居跡から流入したと考えられる縄文土器であった。

第278号土壇（第42図）

調査区北端のAP・AQ-16にまたがって発見した。縄文時代の第82号住居跡・第87号建物跡のビット、そして3本の単独ビットと重複するが、遺構確認作業時に識別できるほどの覆土差があった。

形態は、長軸長3.13m、短軸長0.85m、確認面からの深さ0.28mを測る長方形であり、至近に構築された第277号土壇と共通する特徴を示す。 $N-3^{\circ}-E$ を指す軸設定の方向もわずかな差であり、同一平行すると解して大過ないだろう。覆土も同様の暗褐色が主体となるロームを含有するやや軟らかな土であった。

遺物は、98点が出土した。このうち、1点のみが本

壇の構築期にあたると思われる産地不明の陶磁器類であった。出土量が多いものの、他のほとんどは混入した縄文土器と打製石斧片であった。

なお、本壇出土の縄文土器片が第76号住居跡出土の大破片と接合した(第12図4)。本壇の覆土観察では明確な埋め戻し層を特定できなかったが、同土器の住居跡内での出土位置を考えあわせると、その至近を掘削した第277号土壇の構築者が本壇にその掘り上げ土を投棄した結果と解するのが妥当だろう。

第279号土壇（第42図）

調査区北西端のAP-15・16で検出した。一部が調査区外にかかり、全容は把握できない。また、縄文時代の第80号住居跡と理論上の重複関係にあるが、直接接することはなかった。

現状で短軸長0.99m、深さ0.23m、 $N-5^{\circ}-W$ の軸方向が算出でき、覆土は他遺構と共通する暗褐色系土が主体であった。それらから総合すると、やや丸味を帯びるものの、開口部形態は長方形で、他と同期に構築されたものと考えられる。

遺物は、出土しなかった。

V まとめ

原遺跡第6次調査では、面積は小さいながらも、これまでにない成果をあげることができた。概要は第三章で紹介したが、とくに縄文時代中期における原遺跡の全体像を描くのに有効な材料が得られた。

前回までの調査で明らかとなった竪穴住居跡をはじめとする生活遺構の密集は、今回調査区の北東にも広がっており、これらは西方を中心とする弧を描きつつ、さらに南東につづく気配である(第4図)。この予測をもとに、上越新幹線建設に際しての成果を加味しつつ、原遺跡における中期集落の全体像を想定すると、単純には遺構密集部の外周径が140~150m程度となる環状の集落が展開するかにみえる。

しかし、上越新幹線部分の調査で検出した竪穴住居跡は、北方にくらべて少なく、分布も散漫である。典型的な環状集落を想定するには、いささか心もとない。現在までの調査地点と面積では、集落の全容を予測するに十分な条件と情報に不足するのは確かである。

さらに、北方遺構密集部の北東には、東方の小谷が湾入しており、前回調査ではこちらの谷に面するようにも竪穴住居跡や土壌群がみつまっている。遺構の密集は偶然的産物であり、集落はこの地形をたよりに展開したとの解釈も可能である。

ところが、今回の調査区に分布する平地式建物跡に着目すると、環状化に対するいくつかの傍証を得ることができる。建物跡は、住居密集部が描く弧の内側に分布する傾向がある。類型は異なるものの、神奈川県神志山遺跡(伊藤・坂本1980)や岩手県西田遺跡(佐々木1980)など、中期の類似遺構を多く検出した遺跡でも、環状にめぐる住居跡群や生活主体遺構の内側に接して展開する例が多い。このような例をよりどころに原集落の環状化を推測することも可能である。

平地式建物跡は、原遺跡の調査歴で今回はじめて検出したものである。他の縄文柱穴類にくらべて深く、より太い柱穴4本を一組とし、長方形を形づくる構築物で、10棟を確認した。この遺構を認識した直後、前

回までの調査区でも柱穴類の組みあわせを検証したが、確認を示せる例は発見できていない。

今調査区の北東部では、多くの遺構が重複しており、組みあわせのみならず、建物遺構としての認識にすら疑念をもたれるかもしれない。だが、遺構が希薄な南西部においても、第91号・第92号など、確実な4本の組みあわせが複数確認できた。いずれも抽出に際す余地のない深さで、覆土も、上層が褐色味強く、中層がかえって黒味を増すとともに、焼土・炭化物粒子が他類より多く含まれる点で共通している。

また、建物跡からの出土土器は駒坂、阿玉台系から加曾利E系中葉期までがすべてだが、原遺跡でこれまでに調査におよんだ同時期の竪穴住居跡は、ほとんどが深い竪穴を掘削するか、炉跡が遺存している。このことを考慮すれば、表土化の進行で床面が消失した竪穴住居跡の主柱穴を認識した可能性は薄い。また、調査中は、榎柱を設けたり、長大となる他の類型も念頭に柱穴類の配置を考えたが、整合のとれるとりあわせは成りたななかった。したがって、原遺跡で認定した建物跡は、そもそも平地上に4本柱を一組として建造されたかと判断して大過ないだろう。

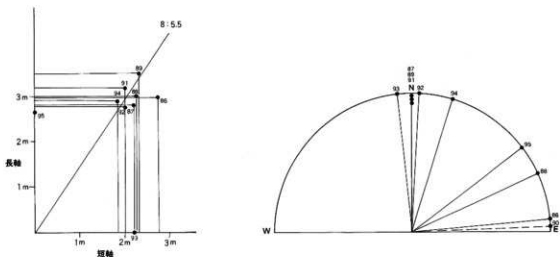
だが、柱のみが直立するもの、平地式、高床式のいずれの上部構造を用いたものなのか、また、生業にかかわるのか、祭祀的な意味あいをもつのかは、柱痕すら確認できなかった調査状況のなかから、にわか結論をだすわけにはいかない。今回使用した平地式建物跡の呼称は、竪穴を掘りこむ住居跡との弁別をめざしたもので、建物の地上構造を示すのではなく、あくまで本書に終始する便宜的な命名である。

これら建物跡のうち、いくつかは拡張あるいは建てかえと目される痕跡を残している。類型は、一方を短軸方向に広げる、もしくは軸を微妙にずらして4本を設置し直す(第87号)、長軸方向に広げる(第89号)、四角の対角線上で四方に広げる(第86号)などがある。このうち、対角線上の類型を援用すれば、第90号の認定

第1表 遺構一覧表(1)

遺構名	グリッド	主軸	長さ(m)	短径(m)	深さ(m)	形態	燃焼部	重複関係(矢印がないものは不明)
第72号住居跡	AS-14	N-38°-W	(2.18)	3.36	0.18	楕円形	—	SK281・282→○→SK264・265
第73号住居跡	AR-13	N-30°-W	(1.89)	4.05	0.27	台形	—	○→SK254
第74号住居跡	AQ-15・16	N-34°-W	(0.87)	(3.08)	0.10	台形	—	—
第75号住居跡	AP・AQ-15	N-77°-E	(3.80)	(2.22)	0.17	円形	土器埋設	○→SJ78
第76号住居跡	AP・AQ-16	N-2°-E	4.48	4.33	0.20	円形	土器埋設	○→SK276・277 SJ82
第77号住居跡	AP・AQ-16	N-35°-W	(2.83)	4.38	0.38	台形	土器埋設	SJ86・90→○→SJ81・SK275 SJ79・82
第78号住居跡	AP-15	—	(5.80)	(1.74)	0.07	円形	—	SJ75・80→○ SK297
第79号住居跡	AP-16・17	N-28°-E	(5.90)	(5.50)	—	楕圓	地床が	○→SK275 SJ77・86
第80号住居跡	AP-15・16	—	(5.90)	(2.80)	—	円形	—	○→SJ78
第81号住居跡	AQ-16・17	—	(0.98)	(2.80)	0.33	円形	地床が	SJ86・90→SJ77→○
第82号住居跡	AP・AQ-16	N-34°-E	(6.72)	(5.90)	—	円形	土器埋設	○→SK277・278 SJ76・77
第83号住居跡	AQ・AR-15	—	(5.36)	(5.70)	—	円形	—	SK295・296→○ SJ85・88
第84号住居跡	AR・AS-13	N-43°-W	(5.30)	(4.90)	—	楕圓	地床が	○→SK251・252・280
第85号住居跡	AQ・AR-15	—	(5.38)	(5.75)	—	円形	—	SJ83
第86号建物跡	AP-16・17 AQ-16	N-85°-E	3.00	2.70	—	—	—	○→SJ77→SJ81・SK275 SJ79
第87号建物跡	AP・AQ-15・16	N	2.85	2.20	—	—	—	○→SK278・297 SJ82・SK298
第88号建物跡	AQ・AR-15	N-65°-E	3.00	2.25	—	—	—	○→SJ83 SK296
第89号建物跡	AR-14・15	N	3.55	2.35	—	—	—	○→SK289→SB2・SK268 SK288
第90号建物跡	AP-16・17 AQ-16	—	—	—	—	—	—	○→SJ77→SJ81
第91号建物跡	AR-13・14	N	3.20	1.95	—	—	—	○→SK258・284 SK285
第92号建物跡	AR-14	N-3°-E	2.80	1.95	—	—	—	○→SK262
第93号建物跡	AR-13	N-6°-W	—	2.20	—	—	—	—
第94号建物跡	AQ・AR-14	N-17°-E	2.90	1.85	—	—	—	○→SK262・263 SK286
第95号建物跡	AQ-14・15	N-53°-E	2.65	—	—	—	—	○→SK272
第2号獨立 柱建物跡	AQ・AR-14・15	N-19°-E	11.76	7.85	—	—	—	SJ89・SK285・289・301・302→○
			9.57	5.43	—	—	—	

第43図 縄文時代建物跡の長短軸比および主軸



第2表 遺構一覧表(2)

遺構名	グリッド	主軸	長さ(m)	短径(m)	深さ(m)	形態	時代	重複関係(矢印がないものは不明)
第250号土壌	AS-12	N-11°E	(1.76)	0.85	0.23	長方形	近世	—
第251号土壌	AS-13	N	(2.00)	1.05	0.34	長方形	近世	SJ84→○
第252号土壌	AS-13	N-5°E	2.47	0.89	0.20	長方形	近世	SJ84→○
第253号土壌	AS-13	—	1.13	1.13	0.15	円形	近世	—
第254号土壌	AR-13	N-9°E	2.28	0.87	0.27	長方形	近世	SJ73→○
第255号土壌	AS-13・14	N-8°E	0.56	0.53	—	方形	近世	SK256
第256号土壌	AS-13・14	N-8°E	(4.02)	0.68	0.27	長方形	近世	SK257→○ SK255
第257号土壌	AS-14	N-9°E	(2.85)	(0.20)	0.21	長方形	近世	○→SK256・258
第258号土壌	AR・AS-14	N-9°E	(9.03)	0.83	0.20	長方形	近世	SJ91・92・SK257・259・285→○ SK260・261
第259号土壌	AS-14	N-9°E	(2.52)	(0.38)	0.10	長方形	近世	○→SK258
第260号土壌	AR-14	N-5°E	(3.27)	(0.37)	—	長方形	近世	SJ91・92→○ SK258・261
第261号土壌	AR-14	N-5°E	2.26	0.77	—	長方形	近世	SK285→○ SK258・260・262
第262号土壌	AR-14	N-5°E	(2.70)	0.86	0.20	長方形	近世	SJ92・94→○ SK261・263
第263号土壌	AQ・AR-14	N-10°E	(2.92)	0.92	—	長方形	近世	SJ94→○ SK262
第264号土壌	AS-14	N	(1.00)	(0.86)	0.15	長方形	近世	SJ72・SK282→○
第265号土壌	AR・AS-14	N	(2.05)	0.96	0.16	長方形	近世	SJ72→○
第266号土壌	AQ-15	N	1.93	0.82	0.13	長方形	近世	—
第267号土壌	AQ・AR-14	N-2°W	3.15	0.75	0.30	長方形	近世	—
第268号土壌	AR-15	N-9°E	2.58	0.83	0.19	長方形	近世	SJ89→○
第269号土壌	AR-15	N-3°W	1.82	1.06	0.51	長方形	近世	—
第270号土壌	AQ-14	N-26°E	2.80	0.91	0.25	長方形	近世	SK290→○
第271号土壌	AQ-14	N-15°E	1.48	0.58	0.05	長方形	近世	—
第272号土壌	AQ-15	N	1.62	0.97	0.20	長方形	近世	SJ95・SK294→○
第273号土壌	AQ-16	—	0.99	0.96	0.11	円形	近世	—
第274号土壌	AP-17	N	1.50	0.60	0.12	長方形	近世	—
第275号土壌	AP・AQ-16	N-5°E	(1.64)	0.68	0.16	長方形	近世	SJ77・79・81→○
第276号土壌	AP-17	N-5°E	1.53	1.04	0.75	長方形	近世	SJ76→○
第277号土壌	AP・AQ-16	N-4°E	(2.80)	0.86	0.24	長方形	近世	SJ76・82→○
第278号土壌	AP・AQ-16	N-3°E	3.13	0.85	0.28	長方形	近世	SJ82・87→○
第279号土壌	AP-15・16	N-5°W	(1.00)	0.99	0.23	長方形	近世	—
第280号土壌	AR・AS-13	—	0.92	0.85	0.20	円形	縄文	SJ84→○
第281号土壌	AS-14	—	(1.42)	(1.25)	0.16	円形	縄文	○→SJ72
第282号土壌	AS-14	—	(0.93)	(0.82)	0.18	円形	縄文	○→SJ72
第283号土壌	AR-13	—	1.22	(0.80)	0.21	円形	縄文	SK303
第284号土壌	AR-13	—	1.42	1.38	0.19	円形	縄文	SJ91→○
第285号土壌	AR-14	—	1.50	(1.17)	0.24	楕円形	縄文	○→SB2・SK258・261 SJ91
第286号土壌	AR-14	—	1.48	1.35	0.15	円形	縄文	SJ94
第287号土壌	AR-14	—	1.26	1.03	0.23	円形	縄文	—
第288号土壌	AR-14・15	N-49°W	0.92	0.81	0.17	方形	縄文	SJ89
第289号土壌	AR-15	—	1.11	1.04	0.16	円形	縄文	SJ89→○→SB2
第290号土壌	AQ-14	—	1.21	1.01	0.28	楕円形	縄文	○→SK290・292
第291号土壌	AQ-14・15	—	1.45	(0.49)	0.11	円形	縄文	○→SK290・292
第292号土壌	AQ-14・15	—	1.19	1.03	0.33	円形	縄文	SK291・293→○
第293号土壌	AQ-14・15	—	1.09	(0.66)	0.18	円形	縄文	○→SK292
第294号土壌	AQ-15	—	1.00	0.89	0.22	円形	縄文	○→SK272
第295号土壌	AQ-15	—	1.18	(0.84)	0.14	円形	縄文	○→SJ83 SJ85
第296A号土壌	AQ-15	N-53°E	(1.21)	0.96	0.10	楕円形	縄文	○→SJ83 SJ88・SK296B
第296B号土壌	AQ-15	N-16°W	(0.70)	0.92	0.11	楕円形	縄文	○→SJ83 SK296A
第297号土壌	AP-15	N-41°E	1.56	(1.12)	0.13	楕円形	縄文	SJ87・SK298→○ SJ78
第298号土壌	AP-15・16	N-52°E	1.88	1.30	0.15	楕円形	縄文	○→SK297 SJ87
第299号土壌	AQ-15・16	—	1.02	(0.76)	0.22	円形	縄文	—
第300号土壌	AQ-16	—	(1.11)	(1.05)	0.19	円形	縄文	—
第301号土壌	AQ-14	—	1.21	1.12	0.34	円形	縄文	○→SB2
第302号土壌	AR-15	—	1.05	1.02	0.10	円形	縄文	○→SB2
第303号土壌	AR-13	N-37°E	1.35	0.83	0.47	楕円形	縄文	SK283
第304号土壌	AR・AS-13	—	1.20	1.02	0.43	円形	縄文	—

と、おおよその軸方向の算出が可能になる。

その他を含めた建物跡の規模は、長軸3.55～2.65m、短軸2.70～1.85mに集中する(第43型)。長短軸の比は、1.11:1～1.64:1の範囲にあり、略平均は8:5.5と1.45:1あたりになるだろう。2穴のみの検出で、長短いずれかがわからない第93号や第95号も、算出可能な軸方向の測定値では、他と同様な値を示しており、両棟の認定を保証する。また、第89号の長軸方向での拡張、そして、同号の拡張後や第94号の極端な長短軸比は、同期の竪穴住居跡に一般的な支柱穴の配置では説明がつかない。つまり、この点からも建物跡が独自の遺構であることが証明できる。

建物跡の軸方位は、北方付近を指すものが多く、6棟が真北を中心とする東西23度の範囲に集中する。これに対し、東方に振れる他の4棟も、時期別に細かくみれば、指向に共通することがわかる。

実は、各柱穴内から出土した土器は小片が多く、しかもその量は少ない。だが、遺物が出土しなかった第94号・第95号を除き、あえて構築期を判断するとすれば、第86号・第88号・第90号が勝坂系後葉期、第87号・第92号が加曾利E系前葉期、第89号・第91号・第93号が加曾利E系中葉期にあたる可能性が高い。

この構築期判定からすれば、前述の東方4棟のうち3棟が、建物跡のなかでも古期にあたることになる。また、柱穴配置の長短軸比も、勝坂期の第86号から加曾利E期中葉の第91号まで、時期を経るにしたがい拡大する傾向がみとれる。

縄文時代のおなじような平地式の遺構は、埼玉県内では狭山市八木前遺跡(書上1996)で前期中葉のものが1棟、日高市宿東遺跡(渡辺1998)で中期後半のものが5棟、そして和光市丸山台遺跡(野中1992・1993)では後期前葉と考えられるものが27棟発見されている。このうち、八木前例は規模の点で、丸山台例は、棟持柱をもち、桁間が長いなど構造の点で、本遺跡とは明らかに様相が異なる。

これに対し、中期後葉とされる宿東例は、本遺跡とおなじ4本類型がまとまって住居群帯と重なるように

分布している。だが、柱穴は開口部が特別に大きい土壇状で、方形から1.31:1と、長短軸比も少ない。

石井寛による集成(石井1989・1995)を頼りに他都道府県の例をひもといても、4本類型は開口部の広い土壇状の掘方が多く、一般に長短比が少ない。また、この類型は中期末以降に多いようである。調査が行き届かない危惧もあるが、中期の4本類型が他類型を混じえずに多く発見された例は稀だろう。その上、他遺跡にくらべて狭い開口部の掘方が長方形に配される本遺跡の建物跡は、これまでの例と一風趣を異にする。

このちがいが用途・地域・時期のいずれによるものか判断つかない。だが、掘方は、時代とともに太く深いものから細く浅いものへと、ますます他遺跡の同類と乖離する傾向がある。また、一例のみだが、拡張手法も、対角線上から長軸方向へと、うわへの配置だけでなく、竪穴住居跡の立柱法から独立した長方形指向への変化が垣間みられる。

しかし、その最終を確定するにあたっては、やはり長短軸比の高い第94号の構築期の裏打ちが必要となる。同号では出土遺物がなく、直接の判断要素はない。これを類推する手だてとして、まず第94号と同様、遺物が出土しなかった第95号と、理論上の重複関係にあるA Q15土器集中についてふれておきたい。

その詳細と根拠は事実記載を参照していただくとして、A Q15土器集中は破碎した土器を並べ、土器の人体(?)把手部がはがされたような痕跡を残すなど、下位の小穴に何かしらを埋納した可能性が強い。

意図的な埋納遺構と掘立柱建物跡が重複した例としては、後期末葉に降る福島県日向南遺跡(鈴鹿1987)がある。土壇状の4本類型で、立柱の痕跡が明確な2棟が調査されている。ともに掘方と単独埋壘がおりかさなって検出されており、所見では、多数の埋壘が重複するにもかかわらず、柱痕を避けるように分布することから、両者は同時存在したものとされた。

また、前出の宿東遺跡では、5棟のうち1棟の掘方に単独埋壘が重複している。これは、同遺跡では唯一、2壘が重なりあい、しかも一方は大小2個体が入れ子

状に埋置されたものである。さらに、入れ子状の埋置はもう1箇所あり、埋置一般とは異なる、径0.80mで0.84mもの深さがある掘方の下位に明らかな柱痕が残されていた。こちらは、立柱と直上の埋納が両立する環境ではなく、連携する柱穴も見つかっていない。しかし、偶然とはいいがたい完全重複が、立柱と埋納という二つの行為の関わりを暗示している。

遠く離れた時と地域、そして間接的な例を引き合いに、事を断じるには慎重でなければならない。また、おなじ埋納でも単独埋納とA Q15の意図は異なるやもしれぬ。ただ、恣意的な単独埋納には、たとえば再葬や小児埋葬など、いかなる時代にも共通する構図が認められている。手法の差こそあれ、A Q15も大方は単独埋納に通ずる理解におよぶだろう。

原遺跡における建物跡すべての用途を規定してしまう危うさをともなうが、もし、宿東例のように立柱と埋納行為に何らかの関係があり、日向南例のように、第95号とA Q15土器集中が連携しつつ共存していたとするならば、第95号は勝坂期後葉の構築となる。

その結果、東に振れる同号の方位軸は、第86号など他の勝坂期建物跡と整合がとれ、10棟の設定軸が時期によって大きく二分される可能性が強くなる。これを応用すれば、遺物が出土しなかった第94号でさえも、長軸比の優位性のみならず、Nに傾く軸方位、さらに分布の偏在という三つの要素から加曾利E期に構築されたことを推測できるようになる。

それだけでなく、竪穴住居跡密集帯と重なり合うような勝坂期の構築位置から、その内帯に定着する加曾利E期への分布の変移も、より鮮明に把握できるようになる。さらに、竪穴住居跡帯と内帯に二分される新古をふたたび軸方位でみなおせば、内帯に進出定着した後者が、密集帯が描き出す弧線に沿うように設定軸をあわせるようになったともみえる。

原遺跡における初期の掘立柱建物跡は、竪穴住居跡の立柱・拡張手法から生じ、重複こそないものの、その分布をおなじくするなかで利用されてきたと考えられる。いわば遺構として未分化の段階であったのだら

う。だが、時を経るにしたがい、遺構構築法の独立性を確立し、長方形化するとともに、集落内での位相に配慮した軸設定をもって内帯に定着するようになる。そして、拡張は長軸方向を基準におこない、第92号と同所で短軸をおなじくする第91号がとってかわる際にも、この基準が適用されたことが想像できる。反面、手間のかかる太くて深い柱穴掘削法の衰退は、建物構築の意図が形骸化したともとれる。

あくまで原遺跡に限ってのことではあるが、軸や規模形態、空間占地や拡張法などから、以上のような建物跡盛衰の筋書きが描きだせるのである。

最終的に、建物跡が、環状にめぐる生活帯の内に、環に沿うような設定軸をもって居ながら姿は、類似の遺構が多く検出された遺跡に通じる。したがって、原遺跡の竪穴住居跡と建物跡群は、環状となる可能性が非常に高くなる。

その場合、遺構密集部の外周径140~150mという推定値はやや大きいような印象をうける。だが、児玉町将監塚(石塚1986)・古井戸遺跡(宮井1989)、花園町北塚屋遺跡(黒坂1985)、嵐山町行司免遺跡(植木1988)、宿東遺跡など、本庄台地から入間台地では150mを超える規模の環状集落が普遍的に存在し、富士見市中沢遺跡(早坂1999)の130mが最大級となる以南の武蔵野・相模野台地の100m前後、甲信地域の100m以下とは地域的な差がある。これに対し、大宮台地では、桶川市高井遺跡(下村1969、野口2000)の150m級、上尾市秩父山遺跡(赤石1978・1987)の100m級などがあり、至近の北遺跡(金子1987)では200mを有に超える規模が想定できる。地理的にみれば、原遺跡の算定値は違和感のない範囲に収まるだろう。

以上、新発見の掘立柱建物跡を手がかりとして、誤認を省みず假定をかさね、原遺跡の全体像を推定した。今調査のきっかけとなった伊奈特定区画整理事業は、今後も遺跡の内外で続行される予定である。集落の環状化、平地式建物跡の分布や軸方向などの当否は遅くない時期に明らかとなるだろう。

引用・参考文献

- 青木美代子 1985 「三番耕地・十八番耕地・十二番耕地・神山」埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第43集
- 新屋雅明 1996 「今羽丸山遺跡」埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第173集
- 赤石光資 1978 「秩父山遺跡」上尾市文化財調査報告書第5集 上尾市教育委員会
- 赤石光資 1987 「秩父山遺跡—第2次調査—」上尾市文化財調査報告書第29集 上尾市教育委員会
- 石井 寛 1989 「縄文集落と掘立柱建物跡」『調査研究集録』第6冊 港北ニュータウン埋蔵文化財調査団
- 石井 寛 1985 「縄文時代掘立柱建物址に関する諸議論」『研究報告』第6集 帝京大学山梨文化財研究所
- 石塚和則 1996 『狩獵塚』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第63集
- 伊藤 郭・坂本 彰 1980 「横浜市神宮丸山遺跡（ル1・2）の調査」『第4回神奈川県遺跡調査・研究発表会要旨』
- 楠木 弘 1988 「行司免遺跡—本文編—」嵐山町遺跡調査会報告4
- 大塚孝司 1989 「楢山遺跡」蓮田市文化財調査報告書第13集 蓮田市教育委員会
- 奥野実生 1987 「宿上貝塚 御林遺跡」埼玉県埋蔵文化財調査報告書第16集 埼玉県教育委員会
- 書上元博 1996 「八木上/八木/八木前/上広瀬北/森坂北/森坂」埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第165集
- 金子直行 1982 「大山」埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第17集
- 金子直行 1987 「北・八幡谷・榎野谷」埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第66集
- 金子直行 1987 「戸崎前遺跡」埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第187集
- 川口 潤 1989 「大山遺跡」埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第84集
- 木戸春夫 1984 「関戸足利」埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第40集
- 木戸春夫 1992 「荒川附遺跡」埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第112集
- 黒坂清二 1985 「北原塚（Ⅱ）」埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第48集
- 佐々木勝 1980 「東北新幹線関係埋蔵文化財調査報告書—Ⅶ—（西田遺跡）」岩手県文化財調査報告書第51集
岩手県教育委員会 日本国有鉄道盛岡工事局
- 笹森健一 1976 「志久遺跡」埼玉県遺跡調査会報告第31集
- 下村克彦 1969 「高井遺跡」埼玉県遺跡調査会報告第4集
- 庄野靖吉 1974 「関山貝塚」埼玉県埋蔵文化財調査報告書第3集 埼玉県教育委員会
- 鈴鹿良一 1987 「真野ダム関連遺跡発掘調査報告Ⅴ」福島県文化財調査報告書第182集 福島県教育委員会 福島県文化センター
- 鈴木敏昭 1984 「茶屋遺跡」白河町埋蔵文化財調査報告書第2集 白河町教育委員会
- 鈴木秀雄 1990 「人針貝塚・浮谷貝塚」埼玉県立博物館
- 田中和之 1987 「宿下遺跡」蓮田市文化財調査報告書第10集 蓮田市教育委員会
- 田中和之 1991 「天神前遺跡」蓮田市文化財調査報告書第17集 蓮田市教育委員会
- 田中和之 1992 「宮の前遺跡」蓮田市遺跡調査会調査報告書第12集
- 田中広明 1985 「西通1遺跡」上尾市文化財調査報告書第22集
- 谷井 彪 1979 「大山」埼玉県遺跡発掘調査報告書第23集 埼玉県教育委員会
- 谷井 彪 1981 「小室天神前遺跡」埼玉県立博物館
- 寺内正明 1994 「馬込八番遺跡」蓮田市遺跡調査会調査報告書第22集
- 西井幸雄 1990 「掘灯木山遺跡」埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第92集
- 野口未幾 2000 「高井遺跡第3次発掘調査報告書」高井遺跡発掘調査会
- 野中和夫 1992 「丸山台遺跡群Ⅰ」和光市埋蔵文化財調査報告書第5集 和光市遺跡調査会 和光市教育委員会
- 野中和夫 1993 「丸山台遺跡群Ⅱ」和光市埋蔵文化財調査報告書第6集 和光市遺跡調査会 和光市教育委員会
- 橋本 勉 1984 「久台」埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第36集
- 橋本 勉 1985 「ささら（Ⅱ）」埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第47集
- 橋本 勉 1990 「雅楽谷遺跡」埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第93集
- 橋本 勉 1999 「戸崎前Ⅱ/薬師堂根Ⅱ」埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第218集
- 橋本 勉 2000 「向原/榎野谷」埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第233集
- 平坂廣人 1999 「勝瀬原遺跡群」富士見市遺跡調査会調査報告書第52集
- 細田 勝 1985 「原・丸山」埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第42集
- 水口由紀子・金子直行 1998 「茶室堂根遺跡」埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第200集
- 宮井英一 1989 「古井戸」埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第75集
- 村田章人 1997 「原/谷畑」埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第179集
- 山下秀樹 1983 「久保山」埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第29集
- 渡辺清志 1998 「宿東遺跡」埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第197集

写真図版



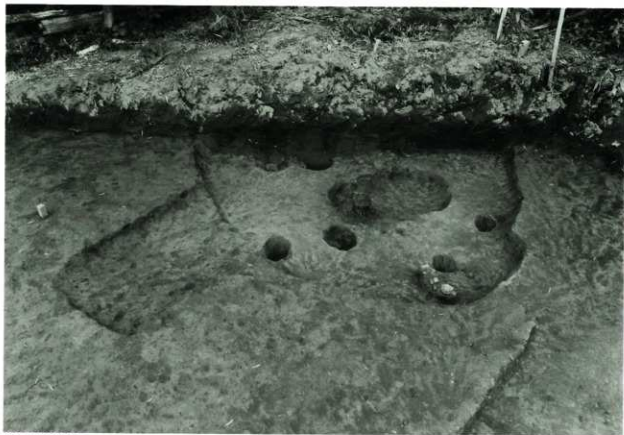
原遺跡第6次調査遺跡航空写真



原遺跡第6次調査遺跡航空写真



第6次調査区全景



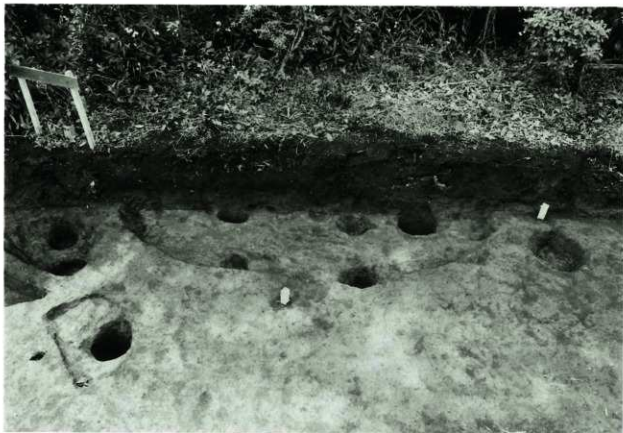
第72号住居跡



第72号住居跡遺物出土状況



第73号住居跡



第74号住居跡



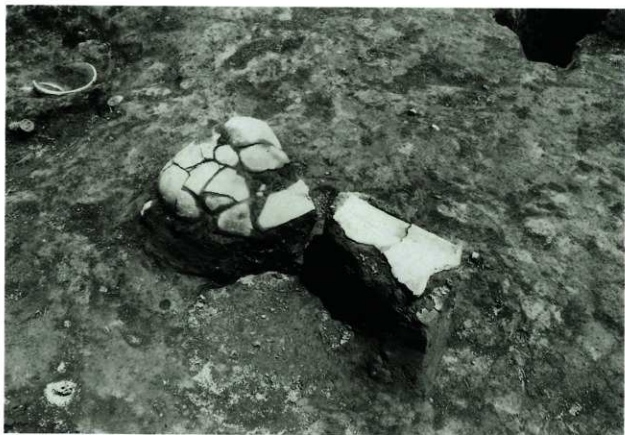
第75号住居跡



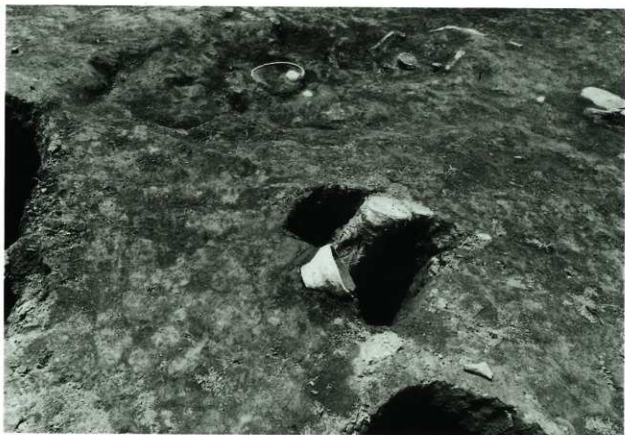
第75号住居跡炉埋設土器



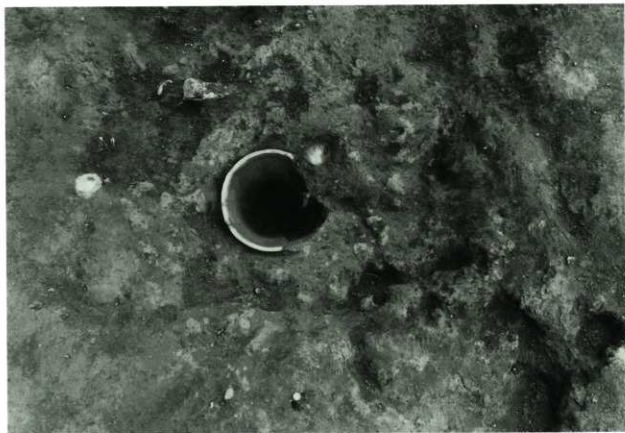
第76号住居跡



第76号住居跡遺物出土状況



第76号住居跡遺物出土状況



第76号住居跡炉埋設土器



第77号・第81号住居跡



第77号・第81号住居跡土層断面



第77号・第81号住居跡遺物出土状況



第77号・第61号住居跡遺物出土状況



第77号住居跡炉埋設土器



第75号・第78号住居跡



第78号住居跡



第79号住居跡



第80号住居跡



第82号住居跡



第82号住居跡炉埋設土器



第83号・第85号住居跡、第88号建物跡



第84号住居跡



第86号·第90号建物跡



第87号建物跡



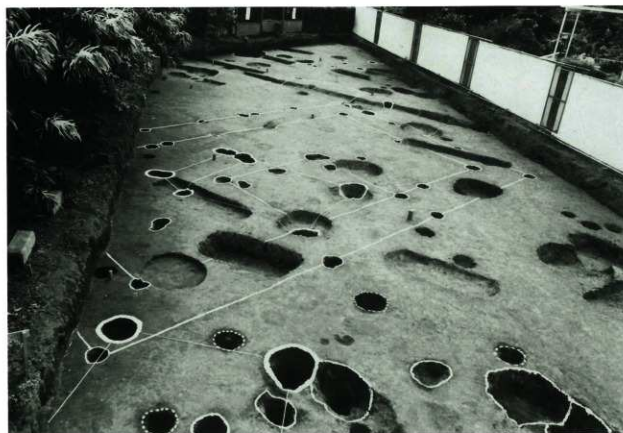
第91号・第92号建物跡



第94号建物跡



第95号建物跡



第2号独立柱建物跡、第89号建物跡



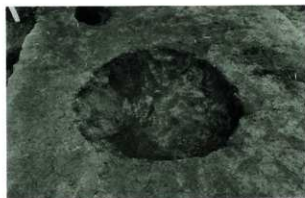
第2号孤立柱建物跡



第251号土坑



第252号土坑



第253号土坑



第254号土坑



第267号土壤



第268号土壤



第269号土壤



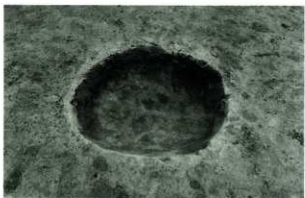
第270号土壤



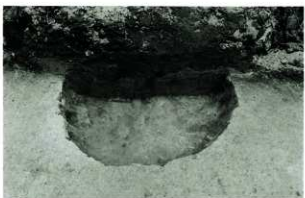
第272号土壤



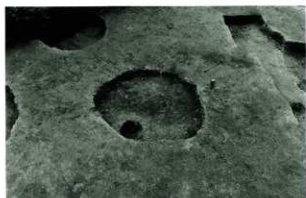
第278号土壤



第280号土壤



第283号土壤



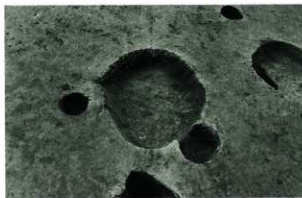
第284号土壤



第285号土壤



第286号土壤



第287号土壤



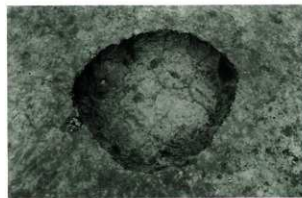
第288号土壤



第289号土壤



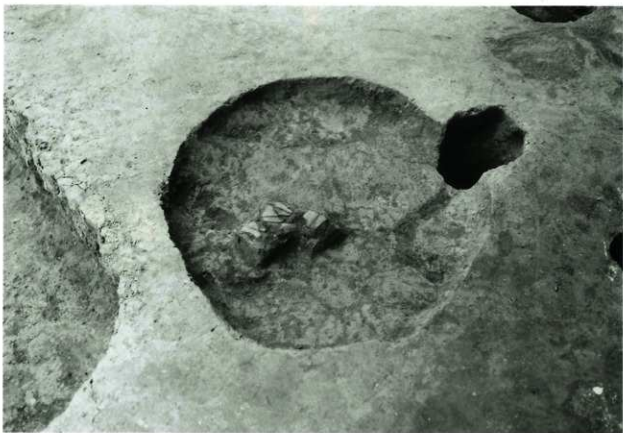
第297号·第298号土壤



第301号土壤



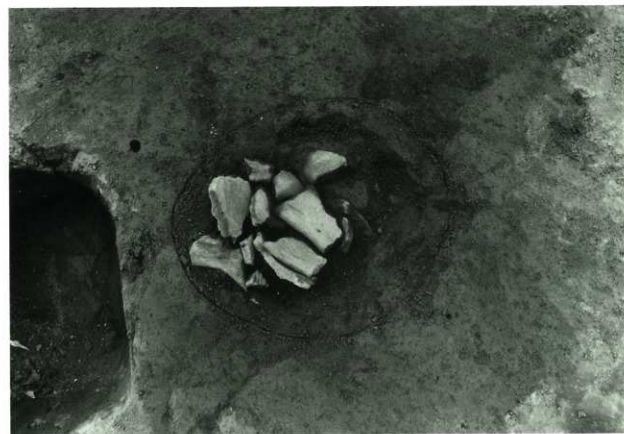
第290号～第293号土壤



第302号土壤



第304号土壇



AQ-15グリッド土器出土状況



第72号住居跡出土土器



第75号住居跡炉埋設土器



第76号住居跡出土土器



第76号住居跡出土土器



第76号住居跡出土土器



第76号住居跡炉埋設土器



第76号住居跡出土土器



第77号住居跡炉埋設土器



第77号住居跡出土土器



第77号住居跡出土土器



第81号住居跡出土土器



第81号住居跡出土土器



第82号住居跡炉埋設土器



第82号住居跡出土土器



第304号土壇出土土器



第304号土壇出土土器



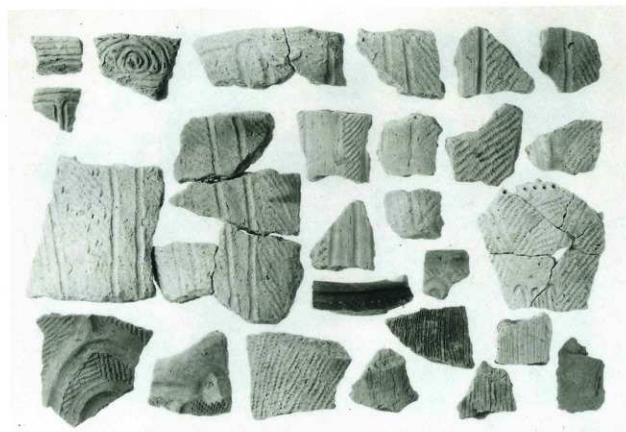
AQ-15グリッド出土土器



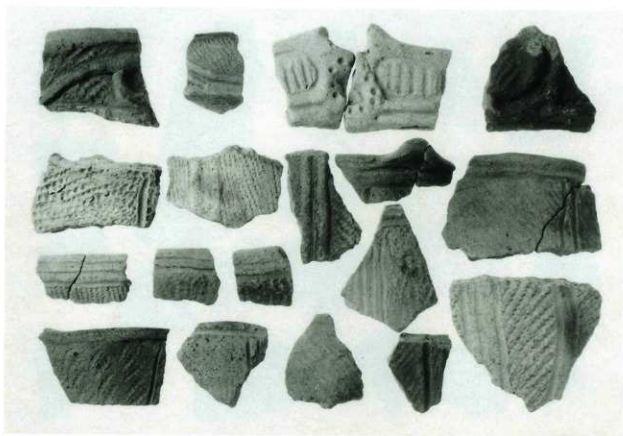
AQ-15グリッド出土土器把手刺落面



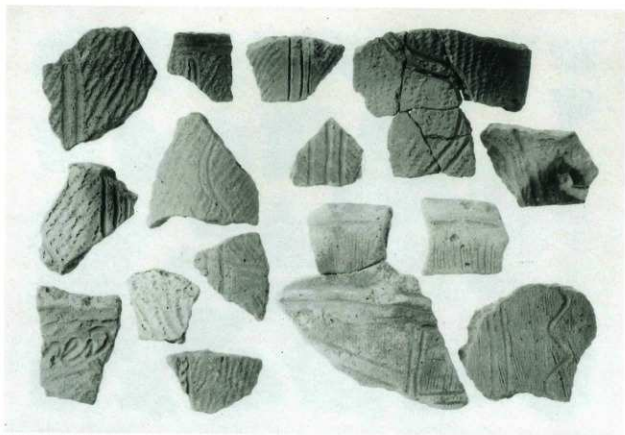
第72号～第74号住居跡出土遺物



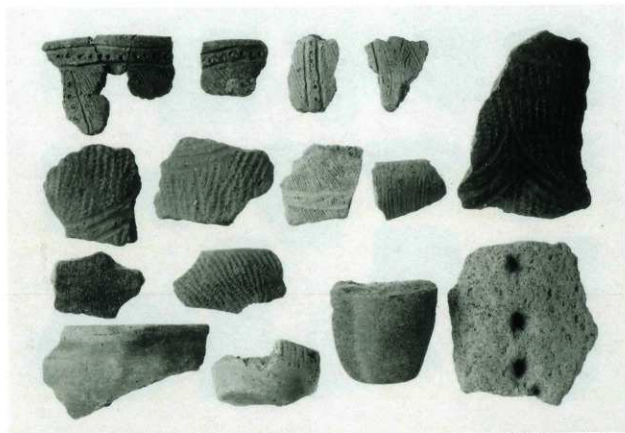
第75号住居跡出土遺物



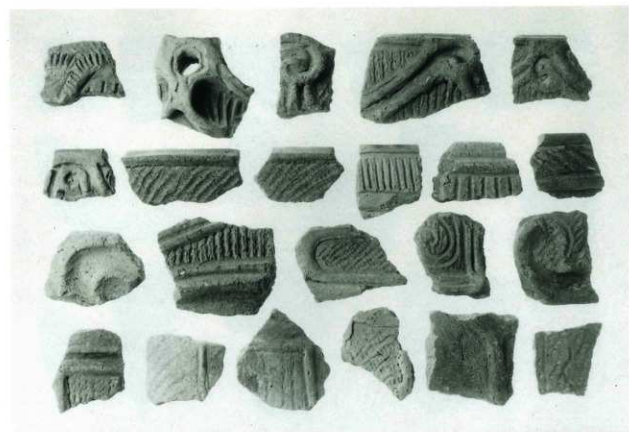
第76号住居跡出土遺物



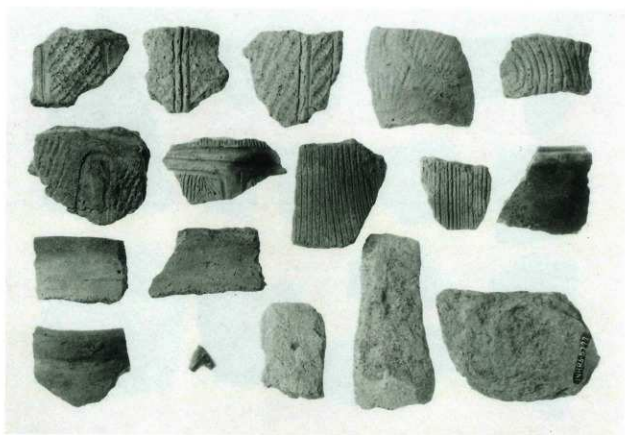
第76号住居跡出土遺物



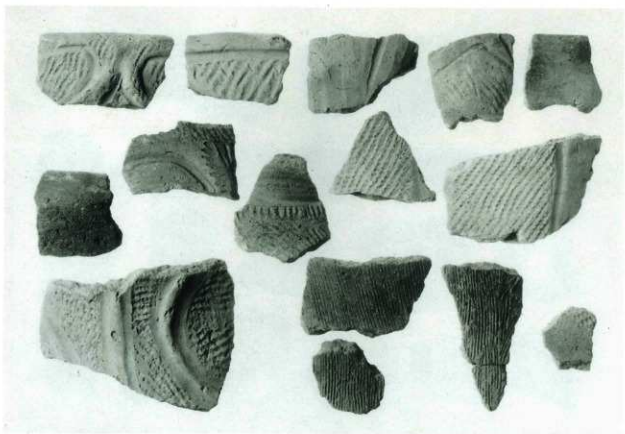
第76号住居跡出土遺物



第77号住居跡出土遺物



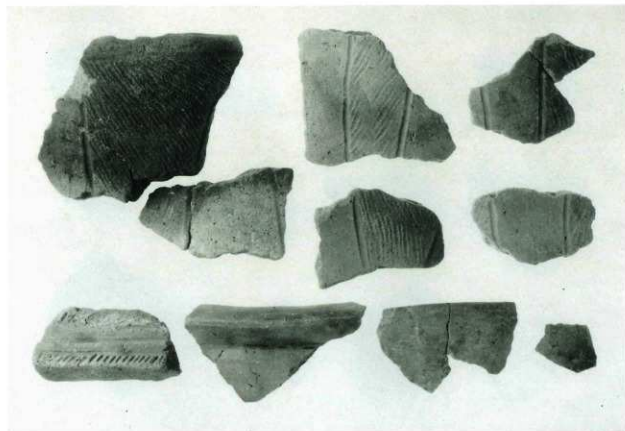
第77号住居跡出土遺物



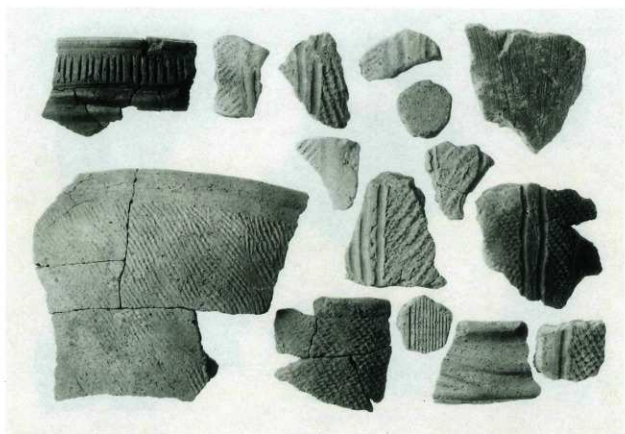
第78号～第80号住居跡出土遺物



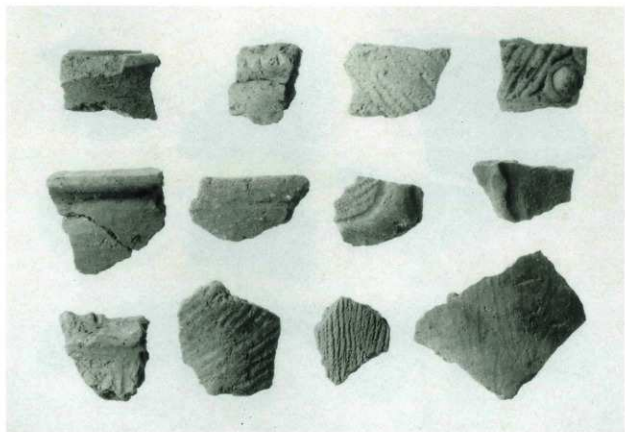
第81号住居跡出土遺物



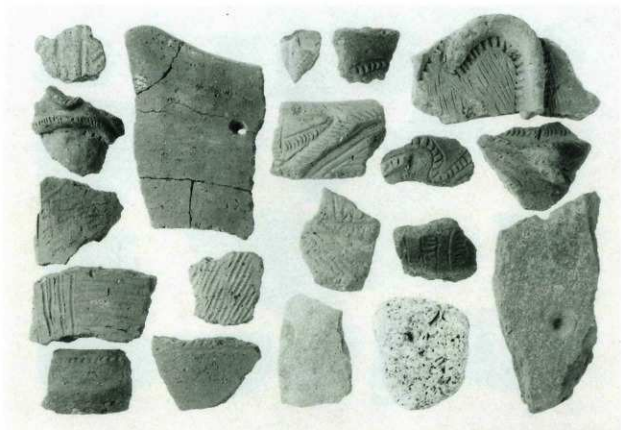
第81号住居跡出土遺物



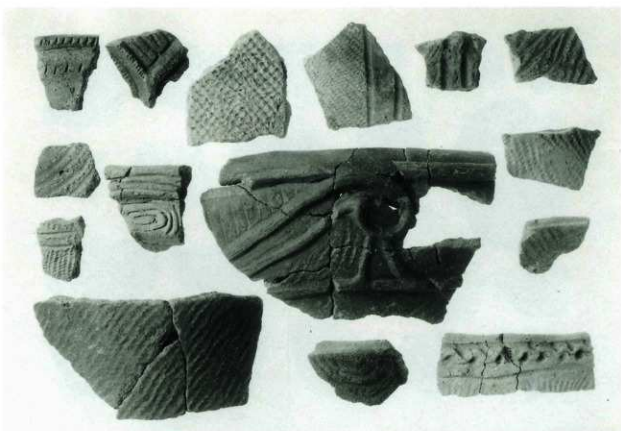
第82号～第85号住居跡出土遺物



縄文時代建物跡出土遺物



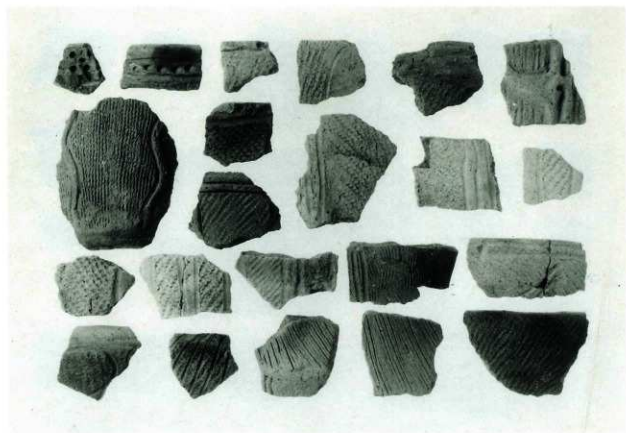
縄文時代土壇出土土遺物



縄文時代土壇出土土遺物



遺構外出土遺物



遺構外出土遺物

報告書抄録

ふりがな	ほらいせき							
書名	原遺跡							
副書名	上尾都市計画事業伊奈特定土地区画整理事業関係埋蔵文化財発掘調査報告							
巻次	Ⅵ							
シリーズ名	埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書							
シリーズ番号	第269集							
著者氏名	黒坂禎二							
編集機関	財団法人 埼玉県埋蔵文化財調査事業団							
所在地	〒369-0108 埼玉県大里郡大里村船木台4丁目4番地1 TEL 0493-39-3955							
発行年月日	西暦 2001 (平成13) 年1月31日							
ふりがな 所収遺跡	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積 (㎡)	調査原因
		市町村	遺跡番号	〇'〇"	〇'〇"			
ほらいせき 原遺跡	さいたまけんきたまふらでん 埼玉県北足立郡 いなほまち大字羽貫 ほらいせき 880番地他	11301	46	36°0'20"	139°36'43"	19990510 ↓ 19990618	504	区画整理
所収遺跡	種別	主な時代	主な遺構		主な遺物		特記事項	
原遺跡	集落跡	縄文時代中期 中世 近世	竪穴住居跡 平地式建物跡 掘立柱建物跡 土塼	14 10 1 55	縄文土器 石器 陶磁器		縄文時代中期の環状集落の一端を調査。同時期の平地式建物跡を検出。	

埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書 第269集

北足立郡伊奈町

原 遺 跡

上尾都市計西事業伊奈特定土地地区画整理事業関係埋蔵文化財発掘調査報告

—VI—

平成13年1月20日 印刷

平成13年1月31日 発行

発行／財団法人 埼玉県埋蔵文化財調査事業団
〒369-0108 大里郡大里村船木台4丁目4番地1
電話 0493 (39) 3955

印刷／巧和工芸印刷株式会社